

『鴨長明集』の贈答歌

—— 寿永百首との比較から ——

野 本 瑠 美

一、はじめに

鴨長明の家集『鴨長明集』（以下『長明集』）は、四季・恋・雑の部立に分けられた総歌数一〇五首の小歌集で、「養和元年五月日」（養和二年の誤写と見る説¹がある）という奥書から、養和元年（一一八一）、長明二七歳の頃に自撰したと考えられている。『長明集』は、後鳥羽院に見出だされ、和歌所寄人として活躍する以前の詠作を記す、歌人長明の始発期の作品として位置づけられている。

歌人としての長明に関する先行研究は『方丈記』研究や伝記研究に比して多くはなく、『長明集』も家集としての作品研究より、長明の青年期を知る数少ない資料として重視されてきた²。だが、それまでさしたる歌歴のない長明がどのような意図をもって家集編纂に臨んだのか、明確な答えは示されていない。そのような中、『長明集』編纂の意図を考える上で重要と思われるのが、寿永百首との関連である。寿永百首とは、

寿永元年（一一八二、五月に養和二年から改元）頃、賀茂重保の依頼により当代の歌人三十六人が賀茂社奉納のために提出した百首型式の家集の総称で、『経盛集』、『殷富門院大輔集』、『頼輔集』などが該当する。

『長明集』も早くからこの寿永百首の一つと指摘されてきた³が、作品を読み解く上で、賀茂社への奉納百首であるということは比較的等閑視されてきた。その理由として、まず、寿永百首自体が「奉納」という観点から読み解かれてこなかったことが挙げられる。さらに『長明集』内に歌林苑や賀茂社との関わりを明示する詞書が見られないのも、賀茂社奉納百首として捉えられなかった一因であろう。だが、近年『長明集』の歌題や表現に、歌林苑歌人との類似が指摘⁴されており、『長明集』が他の寿永百首とどう関わるか、歌人としての初期活動の結実である家集をどう読むべきか、今一度検討する必要がある。本稿では、『長明集』が寿永百首として把握されうる作品であることを再度確認し、家集内に一組のみ収載された贈答歌の意

味を考察していくこととする。

二・寿永百首としての『長明集』

賀茂重保により寿永元年（一一八二）一月に成立した『月詣集』序文には「三十六人の百首をあつめて神の御たからにそなふ」とあり、『月詣集』編纂以前に当代三十六人の歌人の百首が賀茂社へ奉納されたことが知られる。さらに同時代に成立した家集の序跋等、たとえば『経盛集』跋文に「神主重保依願請当世好士各和歌百首可進^ニ納神殿云々^々」（中略）：寿永元年六月十日」とあるように、重保が賀茂社奉納のために歌人たちに百首から成る家集の編纂を依頼したことが見える。これらの家集がいわゆる寿永百首である。

重保の言う「三十六人の百首」に該当する作品として『長明集』を提示したのは、谷山茂氏[＊]が早い。谷山氏は、奥書や家集内の内容から重保の依頼により編纂されたことが明らかな殷富門院大輔、藤原資隆、藤原頼輔、平経盛の家集を挙げ、それらの家集の歌数や部類との近似、成立時期や『月詣集』への入集状況等から、疑問符を付しながらも『長明集』を寿永百首の一つとして示し、「『月詣集』の中に賀茂一族の歌が多いことはいうまでもない。重保が撰んだ当時の三十六人の歌人中にも賀茂一族の誰彼が―いまだ著名歌人でなくとも―入っていたと想像することは許されるの

ではあるまいか」と提起している。

谷山氏の整理を受けて、森本元子氏[＊]は谷山氏が挙げた寿永百首に共通する特色を抽出した。すなわち、

①作者の自撰であり、自詠百首を本体とすること。
②四季・恋・雑の組織をもつこと。ただし、各部の歌数は不定で自由。
③題詠・生活詠の別を問わぬこと。
詞書・題詞などの制限もない。
④寿永元年夏ころの成立であること。
⑤集中の作が「月詣和歌集」にとられていること。
⑥の五項目である。上記条件を判断材料に森本氏は諸家集を調査し、『長明集』を含む二五集を寿永百首候補とした。以後、杉山重行氏[＊]、松野陽一氏[＊]、井上宗雄氏[＊]によって更に精査され、現在二一の家集^⑩が寿永百首と捉えられている。

森本氏が掲げた五つの特徴と『長明集』の内容を再度照合してみると、まず、①については、歌数はほぼ百首であり、詞書には自撰と捉えて矛盾するような記述はない。『長明集』には他人詠（鴨輔光）一首が含まれており、長明自身の詠作は一〇四首である。跋文から寿永百首であることが明らかな『経盛集』や『頼輔集』も自詠は一〇七首、一一九首と百首を越えており、『長明集』のみが特異なわけではない。また、『長明集』には、題詠歌九三首、生活詠（題詠以外の歌）一二首が春・夏・秋・冬・恋・雑の部立に分けられて収められており、②③とも合致する。さらに『長明集』から『月詣集』へは四首入集しており⑤にも合致する。

問題となるのは④の成立年時である。他の家集が寿永元年（一一八二）夏頃成立であるのに対し『長明集』は養和元年（一一八一）と一年ほど早い。ただし、奥書等で年時を明示するのは『経盛集』『経正集』等一部に留まり、他の家集の具体的な成立年時は不明である。また、長明集の奥書の年時については、養和二年（養和二年は五月二七日に寿永へ改元されている）の誤写の可能性も指摘¹されているため、その場合④の基準と合致することになる。以上のように、『長明集』は寿永百首と認定される家集類と共通する特徴を持ち、寿永百首の一つと認め得ると考えられる。

『長明集』には、その他の点においても他の寿永百首と類似した特徴が見られる。『長明集』巻末では、『厭離穢土欣求浄土』の心を「雁」と「月」に寄せた詠歌を配している。

ある聖のすすめにて百首の哥を厭離穢土欣求浄土に寄せて詠み侍し中に、雁を

白雲に消えぬばかりぞ夢の世をかりとなく音はをのれのみかは（長明集・一〇四）

月

朝夕に西そむかじと思へども月待つほどはえこ

そむかはね（同・一〇五）

一〇四番「白雲に」詠では、現世を「仮の世」と知りつつ離れられない嘆きを詠み、一〇五番「朝夕に」では西方浄土を希求しつつも、月に思いを寄せる数

寄心を捨てきれない我身を嘆き、神による導きを期待する内容となっている。

一方、寿永百首でも有房・親盛・寂蓮・隆信・経家・季経・資隆・広言・殷富門院大輔が巻軸部分に哀傷歌や釈教歌を置いており、共通の傾向を持つ。たとえば、資隆の『禅林薈葉集』巻軸は、法華経歌に続き、哀傷に寄せて「夢のうちに夢にまどへる」我が身を嘆く歌で閉じられている。

普門品

日の光ふるる世もなく照らすなりかくてやみに
はならじとぞ思ふ（禅林薈葉集・九九）

人の、むすめにおくれて侍りけるに、ほど
へていひつかはす

夢のうちに夢にまどへる身にしあればおどろか
ぬぞよ人のうへにも（同・一〇〇）

これは、資隆が家集跋文に「神も仏も御恵みは変はらぬことなれば、：（中略）：一つ賢木のうちの睦びによりて、同じ蓮の上に宿る種とならんことを願ひ侍りてなん」と記しているように、奉納による結縁の意図を反映し、法華経歌を捧げ、夢のような世に迷う我身の救済を賀茂の神に祈願したものと考えられる。

また、『長明集』の四季部には六〇首の歌が収められているが、その内九〇%以上が題詠歌であり、かつ「花」「月」などの素題による詠歌よりも「山家卯花」「霧隔行船」などの複合題による詠歌が五八%を占めている。歌

歴の浅い長明の詠作に詠歌条件の複雑な複合題が多く見られるのは一見矛盾するようだが、同様の傾向は、寿永百首歌人のうち、覚綱、有房、長明、親盛、二条院讚岐、広言、親宗にも見られる。

【寿永百首四季部に占める題詠歌の割合】

家集名	四季部 総歌数 (首)	実情詠数 (首)	題詠歌数			四季部に占める割合	
			素題 (首)	複合題 (首)	題詠歌 合計(首)	題詠歌の 割合(%)	複合題の 割合(%)
覚綱集	41	0	7	34	41	100	83
広言集	70	2	21	47	68	97	67
親盛集	71	6	20	45	65	92	63
有房集	64	0	25	39	64	100	61
讚岐集	50	6	14	30	44	88	60
長明集	60	5	20	35	55	92	58
親宗集	86	2	31	46	77	90	53
季経集	44	4	21	19	40	91	43
隆信集	66	15	23	28	51	77	42
小侍従集	41	0	24	17	41	100	41
経家集	44	0	29	15	44	100	34
忠度集	60	3	25	20	45	75	33
経正集	72	3	48	21	69	96	29
頼輔集	52	1	37	14	51	98	27
寂蓮集	50	2	39	9	48	96	18
経盛集	74	20	43	11	54	73	15
禅林游葉集	60	1	53	6	59	98	10
寂然集	70	0	70	0	70	100	0
殷富門院大輔集	50	0	50	0	50	100	0

一方、同じ寿永百首歌人でも『歌仙落書』や『治承三十六人歌合』などに選出され、『月詣集』にも一三首以上が入集する忠度や頼輔、経盛など、当代ある程度の評価を得ていた歌人の家集では複合題の占める割合は半分以下であった。このような傾向が生じる理由については、寿永百首歌人の中でも、相対的に歌歴・力量でやや劣る歌人たちにとって、詠歌に困難が伴う複合題の詠作が、一種の挑戦であり、神への奉納とするのに相応しいと捉えられた可能性などが想像される。家集に撰入する歌については、歌人の経験や力量によって異なる傾向が見られるものの、『長明集』の傾向は詠作・構成の面において他の寿永百首と共通点を持つと判断される。

何より、この時期まで歌合・歌会等への出詠が殆ど確認できない長明が、自発的に家集を編纂したとは考えにくい。さらに、長明の『月詣集』入集歌四首が全て『長明集』から採られており、かつ、寿永百首歌人の入集数と比較しても、頼輔（一六首）や小侍従（一首）など歌人としての知名度の高い老練な歌人には及ばないものの、経家や親宗の六首に次ぐ入集数で、『治承三十六人歌合』等に選出されている有房の三首にも勝っている。『月詣集』において長明が歌歴に比して厚遇されている状況をも考慮すると、重保によって家集奉納を求められ編纂した¹²と考えるのが最も蓋然性が高いと言えるだろう。

三・寿永百首の贈答歌

さて、『長明集』には一首だけ長明以外が詠んだ歌が収められている。通常の家集ならばさして珍しいことではないが、歌数が限定された奉納家集としてみるとやや特殊な位置づけがされているように思われる。以下、鴨長明と鴨輔光との贈答三首を掲げる。

住みわびぬいざさは越えん死出の山さてだに親のあとを踏むべく（長明集・九九）

これを見侍て、かもの輔光

住みわびていそぎな越えそ死出の山この世に親のあともこそ踏め（同・一〇〇）

と申し侍りしかば

情けあらば我まどはすな君のみぞ親のあと踏む道は知るらん（同・一〇一）

九九番「住みわびぬ」詠は、「述懐の心を」と題された一首から成る歌群の最後にあたる。長明は「もう憂き世に住むのはいやになってしまった。さあそれなら死出の山を越えるとしよう。そうしてせめて死への道だけでも親の通った跡を踏めるように」と、父・鴨長継のような禰宜としての栄達を望めないため、死を望む。この歌を見た鴨輔光が「この世に住みがたく思っても死に急ぐようなことはしてはいけませんよ。生きてこの世で親の跡を踏んでごらん下さい」と、死

を口にする長明をたしなめ、現世で親の跡を踏む、すなわち親の地位を継ぐ道を求めよと励ましている。それに対し長明は「情けがあるならば、どうか私を惑わせないで欲しい。あなただけは、親の跡を踏む道がどのようなものか知っているのでしょう。もうこの道しかないのです」と輔光の助言を拒否する姿勢をとる。

長明を諭し導こうとした鴨輔光は、長明の父長継の推挙によって御祖社権祝に栄転（『兵範記』嘉応元年八月一四日条）した人物であり、恩顧を受けた者として、長明に対し同情を寄せ、このような歌を送ったとされる¹³⁾。一方、長明の作については、父を失った後の若き長明の心情をうかがい知るものとして、伝記研究においてよく取り上げられ、「自殺の意志をほのめかし、人の反応をうかがう」作であり、「長明の心情はあまりにもひよわで、穏やかならぬ覚悟というべきであろう」と長明の性質と結びつけられて評されてきた¹⁴⁾。

だが、このやりとりを、若き長明の弱さの表出とのみ捉えてよいものだろうか。そもそも『長明集』に収められている他人詠は、この輔光の歌一首のみである。さらに『長明集』内には人名を明示する例が極めて少ないことにも留意すべきであろう。輔光以外に賀茂社周辺の人名は全く見られず、長明と歌をやりとりした人物についても「ある人」（五八）、「やむことなき人」（八五）、「あるひじりのすすめにて」（一〇四）のよう

に、人名はことごとく鹽化されている。そのような中で「鴨輔光」という名が明記され、詠作までも記録されるのは破格の扱いと言えよう。輔光は歌人として著名な人物ではなく、詠歌も当該歌以外は知られていない。そのような人物の名をわざわざ挙げ、自身との歌のやりとりを記すには何らかの意図が込められていると解すべきだろう。

他の寿永百首に目を転じてみると、たとえば『経盛集』では、四季・恋・雑の全ての部に贈答歌が配され、かつ、その贈答相手が大宮多子などの貴顕や、清輔や俊成といった歌壇の主導者的立場であった人物、歌人として名の通った公通・小侍従・実定らで、同じ平家内の人物や他の寿永百首歌人とのやりとりは少ない。

このことから、『経盛集』の贈答歌は、経盛の晴れの場を記録し、自身の歌人としての力量を神へと示し、神の恵を授かるに相応しいことを証明する働きがあったのではないかと以前指摘¹⁵した。

経盛以外にも、人生の転換点や奉納の目的と関わる事跡を贈答歌によって示している場合がある。『頼輔集』跋文には「齡満^三七旬、位昇^三三品、是偏神恩之至也：（中略）：因^レ茲深為^レ謝^三神德^二」¹⁶とあり、家集奉納には寿永元年に三位に叙されたことを賀茂の神に謝する目的があったと考えられる。『頼輔集』家集巻軸部分はこの意図を反映した構成となっている。

法性寺会、述懐

まちつけて花見る春のなかりせば折にもあはでや
みぞしなまし（頼輔集・一二七）

三位したるのちのあした、左大将のもとより
申遣せる

つひにかく三つの位にのぼりけり二つのしなもう
たがひぞなき（同・一二八）

返し

ななそちに三つのしなにぞのぼりぬる二つの位思
ひかけてん（同・一二九）

同日入道三品俊成卿のもとよりつかはせる
待たれてもつひに咲きける藤の花ひさしくにほへ
こずゑはるかに（同・一三〇）

返歌

年を経て松にかひある藤の花こずゑはるかにたの
もしきかな（同・一三一）

一二七番の官位昇進を待ち焦がれる述懐詠のあとに、三位昇進後の実定、俊成との喜びの贈答歌が並べられている。とりわけ一三〇番俊成の「待たれてもつひに咲きける藤の花」と一三一「年を経て松にかひある藤の花」は、一二七番の述懐詠「まちつけて」「折にもあはでやみぞしなまし」と響き合い、宿願が叶えられた喜びを強調する効果を担っている。

また、『小侍従集』では、贈答歌は全て雑部にまとめられており、女房としての活動や恋人たちとの贈答歌を記した後、贈答歌群の終末部で自身の出家の際に

詠み交わした、以下のようなやりとりを配している。

かくて後さま変へて八幡にこもりたるに、宮
こより人人あまた歌おくられたり

五条三位俊成

かの岸へ渡りにけりな海人小舟すまば逢ふ瀬と思
ひしものを（小侍従集・一〇七）

これが返しとはなくて、こまかなる事どもの
返ごとのおくに

すみし世に逢ふ瀬なかりし石清水をりうれしくぞ
思ひいでたる（同・一〇八）

それに続き、頼輔との出家にまつわる贈答歌（一〇
九・一一〇）、小侍従が仕えた大宮多子からの文への
返歌によって贈答歌群が結ばれ、続く述懐歌・釈教歌
へと連接する。

かくてこもりぬたるに、思はずに宮の御もと
より今まで申さぬなどこまやかにおほせられ
たるに

とふ人もなみにただよふ海人舟のうらみは今ぞこ
ぎかへりぬる（同・一一一）

『小侍従集』では、多子に仕えた女房から俗世を離れ
た出家者への転身が贈答歌によって示されているので
ある。

以上のように、「百首」という限られた歌数の中に
他人詠を取り入れる手法は、家集の編纂意図や奉納の
目的と深く関わっていると判断できるのである。

四・輔光との贈答の意味

再び『長明集』へ戻る。輔光歌を詠出させるきつ
けとなつたのは、長明の「住みわびぬいざさは越えん
死出の山さてだに親のあとを踏むべく」（九九）とい
う歌であった。この詠は雑部の「述懐の心を」と題さ
れた二一首から成る歌群の最後にあたる。前掲『長明
集』引用と重複する箇所もあるが、以下に『長明集』
雑部の全歌を掲げる。

やんごとなき人の若君むまれたまへる事をい
かがとあれば

ともかくもえこそ言はれね松が上に木高くすだつ
鶴の子なれば（八五）

津の国へまかるみちに、昆陽といふところに
とまりて侍に、寝屋の障子にあやしげなる手
にて手習をして侍ば、かたはらにかきつけ侍
津の国の昆陽の葦手ぞしどろなるなにわざしたる
海人のすさびぞ（八六）

山里なる所にあからさまにまかりてよめる
かりに来て見るだにたえぬ山里に誰つれづれとあ
けくらすらん（八七）

もの思ひ侍ころ幼き子を見て
そむくべきうき世にまどふ心かな子を思ふ道はあ
はれなりけり（八八）

述懐の心を

奥山のまさきの葛くりかへしゆふとも絶えじ耐へぬ嘆きは(八九)

あれば厭ふ背けば慕ふ数ならぬ身と心との中ぞゆかしき(九〇)

心にもあらで何ぞの経るかひはよし賤^せの身よ消えはてねただ(九一)

何事を憂しと言ふらん大方の世のならひこそ聞かまほしけれ(九二)

憂きながらすぎのの雉子声立ててさをどるばかり物をこそ思へ(九三)

霜埋む枯れ野に弱る虫の音のこはいつまでかよに聞こゆべき(九四)

世は捨てつ身はなきものになしはてつ何を恨むる誰が嘆きぞも(九五)

憂き身をばいかにせんとて惜しむぞと人にかはりて心をぞとふ(九六)

花ゆへに通ひしものを吉野山心細くも思ひたつかな(九七)

あはれともあだに言ふべき嘆きかと思ふか人の知らず顔なる(九八)

住みわびぬいざさは越えん死出の山さてだに親のあとを踏むべく(九九)

これのみ侍て、かもの輔光

住みわびていそぎな越へそ死出の山この世に親の

あともこそ踏め(一〇〇)

と申し侍りしかば

情けあらば我まどはすな君のみぞ親のあと踏む道は知るらん(一〇一)

懐旧時々といふ事を

思ひ出でてしのぶも憂しやいにしへをさは東の間に忘るべき身か(一〇二)

浄土の相かきあらはしたる中に花の降れる所を

絶えず散る花もありけり故郷の梅も桜も憂しや一時(一〇三)

ある聖のすすめにて百首の哥を厭離穢土欣求浄土に寄せて詠み侍し中に、雁を

白雲に消えぬばかりぞ夢の世をかりとなく音はをのれのみかは(一〇四)

月

朝夕に西そむかじと思へども月待つほどはえこそむかはね(一〇五)

雑部二一首は、「やんごとなき人」のもとに若君が誕生した際の歌に始まり、摂津(八六)や「山里なる所」(八七)へ出かけた際の歌、述懐歌が八八・九九

番まが連続し、述懐歌にまつわる贈答(一〇〇・一〇一)、「懐旧題詠(一〇二)」と続き、釈教歌で家集が閉

じられる。この内、八九番から始まる「述懐の心を」という詞書でまとめられた歌群が雑部の中核を占めて

いる。その内容は「何を恨むる誰が嘆きぞも」（九五）や「うき身をばいかにせんとして惜しむぞ」（九六）などのような強烈な語調による嘆きの歌が連続する。そして、述懐歌群の末尾に置かれた九九番によって、その嘆きの根源が父親の跡を継げないことに由来するものであることが明らかにされる構成¹⁷となっている。

長明の父の鴨長継については、わずか一七歳で賀茂神社下社の神官を代表する正禰宜の地位にいた人物であったこと、若くして台頭しうる英明な有力者であったこと、承安二、三年頃（一一七二―七三）三四、五歳で没したことが明らかにされている¹⁸。三木紀人氏¹⁹は、『方丈記』に記された「スベテ、アラレヌ世ヲ念ジスグシツ、心ヲナヤマセル事、三十余年也。其間、ヲリくノタガヒメ、ヲノツカラ、ミジカキ運ヲサトリヌ」の、最初の暗転「タガヒメ」を、この父の死と捉えている。父という最大の後見役を失った長明は、その後社司に就任することさえ困難な状況になり、先述したような述懐歌を詠むに至ったのであった。

さらには、述懐歌群前後にも、親を失った我が身の不遇が屈折した形で表れている。八五番「ともかくも」詠は、高貴な身分の人の家に若君が誕生したことについて、知人から問われた際の歌である。詞書に「やむごとなき人」と表す場合、単に身分を指示するだけでなく、「やむごとなき人を思ひかけたる男にかはりて」（後拾遺集・恋一・六四三詞書・相模）や、「やむごと

なき人に夢ばかりにいていといたう忍びければ、又え逢はで過ぎけるほどに、此人身まかりにければ」という詞書を持つ「思ひ出での悲しき物は人知れぬ心のうちの別れなりけり」（続詞花集・哀傷・四二四・重之）などのように、詠歌主体との身分差や、身分の懸隔による不如意な状況に主眼がある場合が多い。

歌の「ともかくも」「えこそ言はれね」は、次の二例のように、感情の深さを言葉で表し得ない際に用いられるが、長明歌は二句を重ねて用いるため、表現することを放棄するような語調になっている。

ともかくも言はばなべてになりぬべし音になきて
こそ見すべかりけれ

（千載集・恋五・九〇六・和泉式部）

行く人も惜しむ涙もとどめかね忘るなどだにえこそ言はれね（久安百首・離別・一〇九三・堀川）
三句目以降の「松が上に木高くすだつ鶴の子」は、松・木高し・鶴といった慶賀の歌材を重ねる祝いの歌に散見される用法だが、「松が上に木高く」という表現は、

松がうへに木だかくかかる藤の花手かけとるべき物とこそみね（久安百首・春・四一六・季通）
のように、作中主体には手の届かない存在であることも示す。長明の歌は全体で「あれこれと言い表すこともできません。木高い松の上より巢立つ鶴の子のように、高貴な家に誕生された若君のことですのう」といっ

た内容であるが、そこには「庇護者である父を失った不遇な私のような者には、どのような慶賀の言葉を重ねても、若君の幸福など言い表すことはできない」という卑下と、恵まれた境遇に生まれた若君への羨望がにじみ出ている。

輔光との贈答歌の後に配された一〇二番「思ひ出でて」詠にも不遇な我身が表出している。「懐旧時々」という題は他の歌集に見出せないが、過ぎ去った昔を懐かしむ内容を詠む「懐旧」題の変奏と捉えられよう。長明も「いにしへ」を振り返るが、和歌における「いにしへ」は、以下のように、単なる過去だけでなく、亡き人の存命時を指す場合が多い。

左大臣女御うせ侍りにければ、父大臣のもとにつかはしける

いにしへをさらにかけじと思へどもあやしく目に
も満つ涙かな（拾遺集・恋五・九九一・天曆御製）
後朱雀院うせさせたまひて、上東門院白河に
渡りたまひて風のいたく吹きけるつとめて、
かの院に侍ける侍従の内侍のもとにつかはし
ける

いにしへを恋ふる寝覚めやまさるらん聞きもなら
はぬ峯の嵐に（後拾遺集・雜一・九〇二・範永）
三条太政大臣身まかりてのち月をみてよめる
いにしへを恋ふる涙にくらされておぼろに見ゆる
秋の夜の月（詞花集・雜下・三九二・公任）

一〇二番歌は詠作年時未詳の題詠歌で、詠作当時に意図されていた「いにしへ」の内容は不明だが、『長明集』の排列からは、「いにしへ」は直前（九九一—一〇一番歌）で示されていた亡父の生前を示していると捉えられる。「思ひ出でてしのぶも憂」き、父が生きていた頃ではあるが、そうはいつても「束の間に忘」れることもできないとの煩悶が表された一首と読み取れよう。

『長明集』の雑部の中核では、生きようにも思うようにならない嘆きが連綿と続き、不遇の出発点となった父との死別、父・長継の地位を受け継げなかった我が身のつたなさへと収斂していく。俗世での様々な嘆き、それは遡れば、父・鴨長継の夭折と、長明が後継者としての地位を確立できなかったことに由来することが、九九番歌によって端的に示されている。このような長明の歌に対して詠まれた輔光詠（一〇〇）もまた、家集内で重要な役割を果たしている。「いざさは越えん」と挫折と諦めを表明するかのような九九番に対し、輔光の歌には長明の願望が極めて明確に示されている。死出の山を「いそぎな越へそ」と引き留め、「この世に親の跡」を「踏む」ことを勧める輔光。現世で親の地位を継ぐことこそ様々な嘆きを解消する最高の方策であった。長明があえて、この一首を家集に取り入れたのは輔光歌が長明の願いを正確に言い表していたからではなかったか。さらに、輔光の名を明記して採録

したのは、「この世に親の跡」を「踏む」という願いが、分不相応な高望みなどではなく、他者、特に同じ氏人である輔光からも認められ得るものであることを証明する働きがあったと考えられる。長明は不遇な現状の訴嘆と栄達への願望を、自身の歌のみならず他者の言葉借りることによって神へと示そうとしたのではないだろうか。

続く一〇一番「情けあらば我まどはすな」は輔光に対する長明の返歌である。慰め励ます輔光に対して拒否の姿勢を見せ、あなただけは親の跡を踏む道がどのようなものか知っている、すなわち現世での成就がいかに困難なものかよくご存じでしょう、と長明が切り返したものと捉えられる。だが、「我まどはすな」といった措辞は、

月の明かりける夜、瞻西聖人のもとへいひつ
かはしける

いさぎよき空の気色を頼むかな我まどはすな秋の
夜の月 (金葉集・雑下・六二八・行尊)

などのように、帰依する人物や仏に対して、真の道への導きを願う呼びかけとしても用いられる。当該歌も輔光への信頼を含意した返歌であり、さらに言えば、「私への情けがございましたら、惑わすことなく、どうか親の跡を踏むための正しい道をお示し下さい」という奉納先である賀茂の神への祈願にも成り得るものだったのではないだろうか。

五. おわりに

これまで『長明集』の述懐歌は若き日の長明像を探るための資料として用いられ、輔光との贈答も、長明のやや身勝手に大仰な嘆きと、それをたしなめ慰める輔光の言葉として解釈されてきた。しかし、寿永百首の中の一集として見た場合、『長明集』の雑部は、様々な屈折した思いの根底に父・鴨長継の夭折があることが暗示される配置になっており、述懐歌の収束する先に置かれた贈答歌には、長明自身の抱く望みが同じ鴨氏の人間にも肯定されたことを神へと示す機能があったと考えられる。また、連綿と続く述懐詠も、神へ不遇沈淪を訴え、贈答歌による願望の表出を際立たせる効果を果たしているのだろう。『長明集』九九番は『月詣集』にも取られており、その前後に配された歌は「花咲かで身のあさましくなることは我がなげきにて有りけるものを」(月詣集・八四二・公景)や「位山ふもとの雪に埋もれて花の光を待つぞ久しき」(同・八四四・定家)といった官位栄達を望む詠作であった。同時代を生きた賀茂重保にとっても、長明の述懐詠は単なる嘆きの表明ではなく、社司としての栄達を望むものと解釈されていたと考えられる。『長明集』は若き日の長明の詠歌を集めた単なる家集ではなく、賀茂社奉納という目的に沿って編纂された家集と言えるだ

ろう。

※歌番号は全て『新編国歌大観』に拠る。『長明集』は冷泉家時雨亭文庫蔵本（冷泉家時雨亭叢書『中世私家集二』所収、朝日新聞社、一九九五年一月）を用いたが、私に漢字をあて、表記を改めた箇所がある。他は特に断らない限り『新編国歌大観』から引用し、読点や清濁を私に改め、適宜漢字をあてた。漢文には適宜返り点を付した。『方丈記』は『鴨長明全集』（貴重本刊行会、二〇〇〇年五月）による。

〔注〕

*1 辻勝美「鴨長明集成立年時考」（『語文』57、一九八三年五月）

*2 蓮田善明『鴨長明』（八雲書林、一九四三年）、三木紀人「長明伝の暗部はさぐりうるか―恋愛体験をめぐって」（『国文学 解釈と教材の研究』22・11、一九七七年九月）、三木紀人『鴨長明』（講談社学術文庫、一九九五年二月）など。

*3 谷山茂「月詣集と千載集」（『谷山茂著作集3千載和歌集とその周辺』角川書店、一九八二年一月、初出一九五二年一月）

*4 京都光華女子大学鴨長明集研究会「『鴨長明集』全注解稿」（一）（五）（『光華日本文学』7）11、一九九九年八月）二〇〇三年一〇月）、奥野充子

「『鴨長明集』考―題詠歌の視点から―」（『光華日本文学』8、二〇〇〇年八月）

*5 前掲注3参照

*6 森本元子「私家集の研究」（明治書院、一九六六年一月）

*7 杉山重行「月詣和歌集の考察」（『和歌文学研究』24、一九六九年六月）

*8 松野陽一「鳥帯―千載集時代和歌の研究―」（風間書房、一九九五年一月）

*9 井上宗雄「平安後期歌人伝の研究」増補版（笠間書院、一九八八年一〇月）

*10 確実な寿永百首と認定しうるものは、覚綱集・有房集・禅林撥葉集・皇太后宮大進集・師光集・広言集・二条院讀岐集・殷富門院大輔集・小侍從集・長明集・親宗集・寂然集・隆信集・親盛集・経家集・季経集・経盛集・忠度集・経正集・頼輔集・寂蓮集の二二集。他、存疑として成仲集・実国集・資賢集が挙げられている。

*11 前掲注1参照

*12 長明が三十六人の内に入ったことについて、前掲注1辻氏は、賀茂社関係者であることその他に、家集成立以前からの和歌の指導者であった勝命の引き立てを指摘する。

*13 細野哲雄「鴨長明伝の周辺・方丈記」（笠間書院、一九七八年九月）

*14 前掲注2三木紀人著書参照

*15 拙稿「『経盛集』と奉納—寿永百首をめぐる一考察—」

（『和歌文学研究』100、二〇一〇年六月）

*16 底本「よしつの身よ」だが、意不通のため松平文庫

本（一三六・一二）等により校訂した。

*17 雑部冒頭には「やんごとなき人」の若君誕生の歌（八五）、述懐歌群直前には「もの思ひ侍ころ幼き子を見て」とという詞書を持つ歌（八八）と、雑部の要所要所に「親」と「子」に関わる歌が配されている。

*18 前掲注13参照

*19 三木紀人「長明の出発とその後—父の影をめぐって—」

（『国語と国文学』50-4、一九七三年四月）

本稿は、科学研究費（若手研究（B）24720097）による研究成果の一部である。

（本学講師）

